

〈要約〉

東京近郊観光地における 訪日外国人観光旅行者受け入れ環境の現状と課題 ～埼玉県川越市を事例に～

Current Situation and Issues for Inbound Tourism Promotion in the Suburbs of Tokyo

藤井大輔
Daisuke Fujii

2010年代に入り訪日外国人観光旅行者は増加の一途をたどり、2015年には2,000万人目前に達した。訪日外国人観光旅行者は、富士山を経由した東名阪のいわゆる「ゴールデンルート」や人気の高い北海道内・九州島内を周遊することが多く、国内各地を面的な拡がりをもって周遊するよう促す必要性が指摘されてきた。

そこで、本論では、国内の観光地における訪日外国人観光旅行者の受け入れ環境について、その現状と課題を、東京近郊の著名な観光地の1つである埼玉県川越市を事例に探った。

観光庁が観光立国政策の一環で進めた「訪日外国人旅行者の受入環境整備事業」は、川越市でも地方拠点の1つとして2012年度に実施され、地元の観光関係者には、訪日外国人観光旅行者のニーズを把握し、観光資源を磨き上げるだけでなく、訪日外国人観光旅行者誘客に対する意識向上という一定の成果があった。一方、この整備事業は総務省行政評価局の行政評価において、PDCAサイクルが機能していない面があり、十分な政策効果が上がっていないことも指摘された。また、川越市の観光担当部局へのヒアリングでは、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催と関連した訪日外国人観光旅行者誘客政策なども取り入れられていることが明らかとなったが、急増する訪日外国人観光旅行者対応施策が後手に回り、PDCAサイクルが十分に機能していない面も浮き彫りとなった。

本論での考察を通じて、気軽に訪ねられる首都圏近郊の魅力ある観光地として訪日外国人観光旅行者により強く認識され、訪日外国人観光旅行者への誘客をいかに進められるかが大きなカギであることが明らかとなった。また、観光地として訪日外国人観光旅行者が感じる魅力を磨き上げて、誘客を図り、リピーターを獲得していく地道な積み重ねが必要であろう。

キーワード

観光立国、訪日外国人観光旅行者、多言語対応環境、政策評価、PDCAサイクル